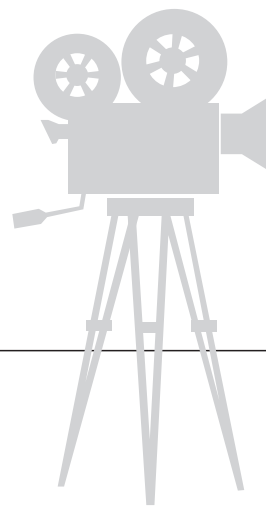


ひとつのジャンルとしての 「ボル・ポト映画」

岡田 知子



近年、ボル・ポト時代をテーマとした映画作品が、アカデミー賞、カンヌ国際映画祭、東京国際映画祭など世界の名だたる映画の祭典で毎年話題になっている。1975年から1979年初めまでのわずか4年弱のこの期間に、ボル・ポトを筆頭とする極端な共産主義を信奉するクメール・ルージュによって、少なくとも国民の約2割に当たる170万人が、虐殺、病気、飢餓、過労から命を落としたといわれる¹⁾。

本稿では、一大映画ジャンルを形成するほどになっている、クメール・ルージュ、あるいはボル・ポト時代に関する主要な作品を「ボル・ポト映画」²⁾と定義し、内容に従って8つのカテゴリーに分けて紹介する³⁾。

殺戮の荒野の始まり—— 男たちの闘いの物語

「ボル・ポト映画」の始まりとなったのが『キリング・フィールド』(1984)である。1984年のアカデミー賞で助演男優賞、編集賞、撮影賞の3部門受賞したこの作品が、世界に現代カンボジアにおける惨劇を知らしめたといっても過言ではないだろう。日本では劇場公開に先駆けて1985年に開催された第1回東京国際映画祭で上映された。筆者は当時、難民として日本で生活していたカンボジアの若者たちと一緒に見る機会を得た。ボル・ポト時代を経験してきた彼らは、「実際にはこれよりももっと悲惨だった」と客席で不満を漏ら

し、NHKホールでの舞台挨拶に立った助演のハイン・ニョルは「共産主義はいけない、絶対に許せない」と絶叫した。

この作品については公開後に賛否両論あったが、現在では、敬意を表する意味も込めて、カンボジア国内外でのカンボジア関連の映画祭でたびたび上映され、数多くある「ボル・ポト映画」の中ではすでに「古典」ともいえる作品となっている。1970年代のカンボジア、および世界情勢は非常に複雑であるが、初心者にも極めてわかりやすいストーリーに整理した上で、ハリウッド映画としての娯楽性を兼ね備えた作品となっている。物語は、ボル・ポト時代が始まる数か月前のプノンペンに緊迫した様子から始まり、クメール・ルージュによるプノンペン陥落、狂気に満ちたボル・ポト時代、同政権崩壊後のタイ・カンボジア国境への逃避行、タイの難民キャンプでの様子までが描かれている。プッチーニの歌劇『トゥーランドット』やジョン・レノンの「イマジン」などの音楽を効果的に使いながら、マスゲーム的な迫力のある強制労働のシーンや、緊迫した中での脱出劇、観客を一度安心させた直後に震撼させるというハリウッド作品の「お約束」を所々に挿入して、観客を最後まで絶えずひきつけ、主人公であるアメリカ人記者シドニーとカンボジア人助手ブランの「感動の再会」で終わる。

この作品でブランとして好演し、アカデミー助演賞を受賞したハイン・ニョルは、同作品によってカンボジアの悲劇を世界に伝える代弁者となっていったが、1996年にロサンゼルスの中環街で強盗に射殺され、55歳の生涯を閉じた。『ハイン・ニョルのキリング・フィールド』(2015)は、この生涯について描いたドキュメンタリーである。彼の自伝 *Haing Ngor: A Cambodian Odyssey* (1988) (『キリング・フィールドからの生還——わがカンボジア〈殺戮の地〉』光文社、1990) に基づき、カンボジア内戦やボル・ポト時代に関する資料映像、ハイン・ニョル自身の活動を写した写真や映像、そしてそのような視聴覚資料を補うアニメーションで構

1) Cambodian Genocide Program, Yale University (<http://www.yale.edu/cgip/>) [Accessed 8 November 2015]

2) 「ボル・ポト映画」という名称が初めて使用されたのは、おそらく木村文「なぜ経済成長を目指すのか」「ボル・ポト映画」への授賞にみるERIAの果敢な挑戦」(2014年11月11日付)である。
(<http://diamond.jp/articles/-/62013>) [Accessed 8 November 2015]

3) カンボジア人の人名は姓・名の順であるが、日本語と異なり、姓と名に使われる名前は区別できないものが多い。欧米のメディアによっては、名・姓の順にしているものもある。またローマ字表記をカタカナ表記にする際に、英語式に読んだためにカンボジア語の原音と異なってしまったものもある(例: リティ・パニユ／リティ・パン、ハイン・ニョル／ハン・ガオ)。本稿では、姓・名、あるいは名・姓の順を問わずに、一般に公開された資料に掲載されている表記に従う。

成されている⁴⁾。

『キリング・フィールド』と同じように、ポル・ポト時代になる寸前のクメール・ルージュと親米政権の内戦に関する報道で活躍し、クメール・ルージュに捕えられ亡くなったカメラマンたちの物語を描いたのが『地雷を踏んだらサヨウナラ』(1999)と『自由への道』(2010)である。前者は一之瀬泰造の生涯を描き、後者は当時多数活躍していたであろうアメリカ人報道カメラマンを念頭においたフィクションである。1970年代のカンボジア国内の報道カメラマンは、ベトナム国内とは異なり戦闘服ではなく、一般市民であることを示すために白っぽいシャツを着なければならなかったのだが⁵⁾、これらの作品では「戦場カメラマン」、「ファッション性」を意識してか、主人公たちは迷彩色の戦闘服を着用している。

『キリング・フィールド』と合わせて見ると興味深いのが『運命の門』(2014)である。これは1960年代からクメール・ルージュによるプノンペン陥落直後までカンボジアで活躍していたフランス人民族学者フランソワ・ビゾの自著 *Le Portail* (2000) (『カンボジア 運命の門——「虐殺と惨劇」からの生還』講談社、2002) を映画化したものである。1940年生まれのビゾは、24歳のときに仏教研究のためにカンボジアに渡る。物語前半はビゾが1971年に地方での調査にでかけた際に、後のトゥオル・スラエン政治犯収容所(S21)所長となるドゥッチにスパイ容疑で捕えられ3ヶ月間拘束されたときの話で、ドゥッチとの精神的な対立が描かれる。後半はクメール・ルージュのプノンペン入城後、生命の危機を感じてフランス大使館に逃げ込んだ人々が、クメール・ルージュの命令のもと、タイ国境に退避するまでの物語である。この後半部分は、『キリング・フィールド』の前半部分で描かれているのとはほぼ同じ場面である。カンボジア語が流暢であったビゾは、クメール・ルージュとフランス大使館との交渉の場で通訳となったほか、クメール・ルージュの許可のもと、プノンペン市内に残留している外国人の搜索や、大使館内に避難している2千人あまりの人々の食糧などを調達する役目を果たす。アメリカ人記者とフランス人学者が見たフランス大使館内での状況や、カンボジアに対するまなざしには相違が見られる。

これらの作品に共通しているのは、いずれも外国人

男性、あるいは外国人に繋がるカンボジア人男性が、仕事や自分の夢を全うするために自分の意思で内戦の「非日常」のカンボジアに滞在しており、そのためにクメール・ルージュによって生命の危険にさらされる、という点である。カンボジア語は作品中の中心的な言語ではないことから、外国人からの視点が強調されていることがわかる⁶⁾。

殺戮の荒野で続く「日常」—— 女たちの闘いの物語

ポル・ポト時代の人々の詳細にわたる暮らしぶりを物語の中心に据えた作品には、『九層の地獄』(1987)、『空白のページ』(1991)、『遙か彼方に』(2010)がある。

『九層の地獄』は、1970年代、チェコスロヴァキア人青年医師のトマと裕福な家の娘であるカンボジア人女性ケマーが結婚するが、クメール・ルージュのプノンペン陥落で、二人は離ればなれになる。ポル・ポト政権崩壊後、妻と生まれたはずの子どもを探しにトマがカンボジアを再訪し、生き残った人たちからS21で亡くなった妻がどのような日々を送ったかを聞く、という物語である。ポル・ポト政権崩壊後、初めてカンボジア国内ロケを行った作品となり、1970年代のプノンペンや郊外の様子が当時のままに再現されている。ケマーは、クメール・ルージュの発行していた幹部向けの雑誌のカバーガールに抜擢され、S21にあった写真スタジオの様子などが出てくるところも、ほかの作品にはない、事実に基づいた場面である。また海岸にトマと遊びに行ったケマーが夕日の沈む海に向かってトマとともに全裸で歩いていくシーンがある。社会主義体制下にあったものの、チェコスロヴァキアとの合作だったからこそ可能となったシーンだったと考えられる。この作品は、現在にいたるまでカンボジア国内でしばしばテレビ放映されている。

『空白のページ』は、クメール・ルージュ幹部と結婚したカンボジア人女性ヴィスナーが、先にカンボジアに

6) *Before the Fall* (2015) もここに分類される作品である。オーストラリア人監督 Ian White によるフィクション作品で、クメール・ルージュによって包囲され陥落寸前のプノンペンのナイトクラブで、一人のカンボジア人女性歌手を巡ってフランス人戦場カメラマンとアメリカ人ビジネスマンが争いを繰り広げる、という物語であるが、2015年11月8日現在、予告編は視聴できるが、作品はリリースされていない。

Jackson, Will. 2014. "Love in the time of the Khmer Rouge" *The Phnom Penh Post*. 30 August <<http://www.phnompenhpost.com/post-weekend/love-time-khmer-rouge>> [Accessed 8 November 2015]

4) <<http://haingngorfilm.com/the-film/>> [Accessed 8 November 2015]

5) 平敷 安常『キャバになれなかったカメラマン(上)』2009年、講談社、pp.361-364.

帰国していた夫に呼ばれ、二人の娘を連れて、ボル・ポト政権下のカンボジアに北京から帰国するところから物語は始まる。そこは「理想の革命」を目指した異常な世界で、ヴィスナーは夫や娘たちと生き別れ、過酷な日々を送る。性別年齢別集団による強制労働、子どもが親を密告する制度、食糧事情、医療、強制結婚や強姦など、ボル・ポト時代にあったさまざまな「狂気」を淡々と映し出す。この作品はボル・ポト時代を過ごしたフランス人女性ローレンス・ピックの手記 *Au-delà du ciel: Cinq ans chez les Khmers rouges* (1984) を参考にしたと考えられる。20代後半で、強い左翼思想に傾倒したローレンスは、クメール・ルージュ幹部のスオン・シクオンと出会って結婚、1975年10月10日、二人の娘を連れて北京からプノンペンへ渡る。彼女はプノンペンで外務省の仕事として翻訳に携わりながら、自給自足の生活として農作業にも従事したが、常に粛清の恐怖を感じていたことが記されている。

この作品は、ドキュメンタリーに近いといってもいいほど、人々の生活が詳細に描かれ、なおかつ、観客を飽きさせないほどのストーリー性もあり、非常に評価できる作品のひとつである。1992年のアジアフォーカス・福岡映画祭でも上映され、NHKの「アジア映画劇場」でも放映されている。しかし現在までカンボジア国内、あるいはカンボジア関連の国内外の映画祭では、全く取り上げられていない。これは監督がベトナム系スイス人男性であるということが影響しているのかもしれない。カンボジアでは、ベトナムとの関係に今も国民感情が刺激されることが多々ある。ボル・ポト政権が崩壊した1月7日は「虐殺政権からの解放の日」として現在、国民の休日になっているが、この日を「ベトナム支配の始まった日」と批判するグループもある。この作品をカンボジアの公の場で紹介することはリスクを伴うと認識されている可能性もある。

『遙か彼方に』は、カンボジア国内のカンボジア人監督が外国の支援を受けずに撮った初のフィクションの「ボル・ポト映画」である⁷⁾。2012年にアカデミー外国語映画賞のノミネート作品としてエントリーし、カンボジア国内各地での無料観賞会や、またアメリカのカンボジア人コミュニティでの上映会が開催され、国内外のカンボジア人にも評価の高い作品である。これは監督の妻であり女優、そして王立芸術大学の教授の

コウ・ソティアリーの家族の物語で、この作品ではソティアリーの演じる彼女の母が主人公となっている。この作品の特徴は2点ある。1点目は、この時代を経験したカンボジア人が共有する具体的な事象が丁寧に描かれていることである。プノンペンを追放され地方への移動中の野宿生活の様子、稲作の具体的な作業内容、さらに「非常に薄い粥」とだけ描写されることが多い食糧事情については、密かに水田で捕った蟹やバナナの木の下での調理法、集団食堂で配給された菜っ葉のスープと岩塩ひとつまみの食べ方などである。もう1点は、水田、夕日、石畳を流れる水、水平線の見える湖など、カンボジア人の誰しもが懐かしいと思う自然の風景をふんだんに挿入している点であろう。

これら3つの作品では、主人公がいずれも既婚で子持ちのカンボジア人女性で、クメール・ルージュが「人民の敵」とみなす「旧社会」では、知識階級に属し、裕福な生活を送っていた、という設定である。いずれもドラマチックな展開はなく、極限状態での毎日が続く様子が淡々と描かれる。主人公たちは革命組織にたち向かって毅然として闘うのではなく、革命組織の命令に従い、黒い農民服を身につけ、長かった髪を短く切り、「革命的な女性」となって強制労働に従事する。夫や子どもの身を案じることもしかできない。その過酷な現実を受け入れながらも、希望を失わずに前を向いて生きて行くことが、主人公たち、つまり女たちの闘い、物語であり、それがカンボジアの悲劇の表象にもなっている⁸⁾。

世界にカンボジアの悲劇の存在を訴える—— リティ・パンの作品群

映像を通してカンボジアでの悲劇の存在を世界に知らしめたのはリティ・パンである。リティ・パンは、フィクション、ドキュメンタリーともに数多くの「ボル・ポト映画」を世に送り出してきた。その中でも、『消えた画——クメール・ルージュの真実』(2013)は、2013年のカンヌ国際映画祭〈ある視点部門〉でグランプリを受賞、また2014年のアカデミー賞外国映画賞にカン

7) 1980年代、90年代にもカンボジア国内のテレビ用ドラマとしてフィクションの「ボル・ポト映画」は複数制作されているが、本稿では取り上げない。

8) 2016年、アンジェリーナ・ジョリー・ピットがルオン・ウン著 *First They Killed My Father: A Daughter of Cambodia Remembers* (邦題:『最初に父が殺された』、無名舎、2000) をもとに撮る作品が公開される。同書は、ボル・ポト時代ではまだ5歳だった裕福な家庭に育った少女ルオンが、過酷な状況のもとで両親やきょうだいを失いながらも生き抜く物語である。Jackson, Will. 2015. "Jolie Pitt prepares for film adaptation of KR-era memoir" *The Phnom Penh Post*. 29 July. <<http://www.phnompenhpost.com/lifestyle/jolie-pitt-prepares-film-adaptation-kr-era-memoir>> [Accessed 8 November 2015]

ボジア映画として初めてノミネートされた。クリストフ・バタイユとの共著で自伝ともいえる*l'élimination* (2012) (『消去』現代企画室、2014)を基に、土塊を彫って作成した100体以上のミニチュアの人形を場面ごとにセットし、それを細かいカメラワークによって作成した映像と、ポル・ポト時代に作成されたプロパガンダ映像を組み合わせて、リティ・パン自身が経験し、思索したポル・ポト時代を描いたものである。この作品では、リティ・パンのほかのフィクション作品である『田んぼの民』(1994)、『戦争の後の美しい夕べ』(1998)、大江健三郎の「飼育」をポル・ポト時代以前の内戦を舞台として翻案した『飼育』(2011)で使われた音楽やシーンが少しずつ採り入れられており、これらがひとつの作品群であることがわかると同時に、その関連性から個々の作品をより深く理解することができる。いずれの作品も、主要な登場人物の父親は不在で、リティ・パンの父に対する憧憬が通奏低音となっている。

ドキュメンタリー作品には、リティ・パンが創設したボパナ視聴覚リソースセンターの命名のもととなった女性⁹⁾の物語『ボパナ——カンボジアの悲劇』(1996)、虐殺が行われた政治犯収容所S21で加害者である元看守と「囚人」として扱われた被害者を対峙させ、それぞれの立場からそこで行われていたことを証言させ、行動を再現させた『S21クメール・ルージュの虐殺者たち』(2002)、S21の所長ドッチに対する綿密なインタビュー『ドッチ、地獄の所長』(2011)がある。

リティ・パンはフランスに拠点を置きつつ1990年代からカンボジア国内でも活躍してきたが、最近になるまでリティ・パンやその作品についてはカンボジア国内での関心は高かったとはいえない。リティ・パンの作品が世界的に注目されるようになり、また2006年に開館したボパナ視聴覚リソースセンターから若いフィルム・メーカーが輩出されたのが、ターニングポイントであったと言えるだろう。同リソースセンターは、将来を担う若いカンボジア人を映像や写真などのメディアを通して育成することを目的に設立された¹⁰⁾。「過去を理解することは未来を知ることになる、映像や写真などのメディアは私たちに考える糧を与え前進する原動力になる、教育によってこれらのメディア

を分析し、技術を獲得し作品を創ることで、自らの声を挙げ、見て感じたことを表現することができるようになる」というリティ・パンの信念のもとに、現在、視聴覚資料の収集・保存、人材育成プログラム、一般向けのさまざまなイベント開催を行っている¹¹⁾。いまだに映画学校が存在しないカンボジアでは同センターが映画制作を学ぶことができる数少ない機関の一つとなっている。

経験を語るすべを得て——ディアスポラの苦悩

リティ・パンのようにポル・ポト政権崩壊後、カンボジア・タイ国境の難民キャンプを経てアメリカ、カナダ、フランス、オーストラリアなどに難民として渡ったカンボジア人は約23万人に上り、そのうちの約15万人がアメリカに定住した¹²⁾。ディアスポラとして新たな人生を歩むことになったカンボジア人は、ポル・ポト時代のさまざまな体験をトラウマとして抱えることになる。幼少期にカンボジアを離れ、大人になり、親世代になるにつれて、自らの記憶、そして親たちの経験、カンボジアの歴史を自分に近づけて深く知りたいという欲求が沸き起こってくる。定住先の言葉を獲得し、経済的にも余裕ができて、いろいろな意味において自由を手に入れ、語るすべを得たディアスポラたちは、さまざまなメディアを通して、語り始める。

アメリカ人の養子となってアメリカに渡った男性アンチョーン・ポンドが伝統音楽を通して、カンボジア人としてのアイデンティティを取り戻す道行きを描いたのが『笛吹き人』(2003)である。アンチョーン・ポンドはカンボジアで伝統音楽を演奏する楽団一家に生まれ、クロイという縦笛奏者として育ち、ポル・ポト時代は、クメール・ルージュに対して演奏することで奇跡的に生き延びることができた。アンチョーン・ポンドが現在、アメリカとカンボジアで音楽家、そして人権活動家として活動している様子も描かれる。

同じくアメリカ人の養子として10歳のときにアメリカに渡った男性サヨアン・スアンは、6歳のときに、クメール・ルージュによって強制的に兵士にさせられた。リティ・パンの『飼育』にも見られるように、1970年代前半の内戦中に、何千人もの子どもがクメール・

9) ポル・ポト政権下の1977年にS21に収容され、5カ月間、拷問を受け、何千頁にも及ぶ自白書を書かされた後、処刑された。
(<http://bophana.org/about/bophana/>) [Accessed 8 November 2015]

10) (<http://bophana.org/about/>) [Accessed 8 November 2015]

11) 同上

12) “Resettlement of Indochinese refugees by destination, 1975–95” p.99 (<http://www.unhcr.org/3ebf9bad0.pdf#search=Thai+Cambodia+border+refugee+the+third+country>) [Accessed 8 November 2015]

ルージュによって強制的に兵士にさせられたことは、あまり知られていない。『ロスト・チャイルド』(2013)では、サヨアン・スアンが、同じく幼少期に難民として渡米したカンボジア人女性と結婚し、ともにカンボジアを訪れ、生き別れたきょうだいたちと再会、失われていた家族愛と自身の存在価値を取り戻す様子を描いている。

『毒の木を離れて』(2006)はボル・ポト時代を生き抜き、現在アメリカに住む女性ティダー・マムが、1975年に消息を絶った父のこと、そして自らの悲惨な体験と怒りの根源を知るために姉妹とともにカンボジアを訪れる物語である¹³⁾。敵への怒りが憎悪と化し敵を殺してしまうというウィリアム・ブレイクの「毒の木」をタイトルの一部とした本作品は、クメール・ルージュ特別法廷を前にして、まだ現実と向き合えない多くのカンボジアの人々の苦悩を映し出す。

『キャンプ32』(2014)では、難民となってオーストラリアに行った男性ブンホム・チョーンが、6歳のときに過ごした収容所「キャンプ32」を探す物語である¹⁴⁾。ボル・ポト時代、最も厳しい状況にあったといわれるカンボジア北西部にあった「キャンプ32」では、3万人が虐殺されたと言われているが、記録や資料は一切現存しておらず、ブンホム・チョーンは幼い頃の記憶と関係者へのインタビューをもとに、現場を探し歩く¹⁵⁾。それは自らの過去を探し、失われた記憶を埋めて行く作業でもある。

『赤い感覚』(2006)は、1988年に家族とともに難民としてオーストラリアに渡った男性ティム・ペクの作品である¹⁶⁾。全編オーストラリアを舞台にしたフィクションである。オーストラリアに移住したカンボジア人女性ミアリアは、ボル・ポト時代に父を殺したクメール・ルージュの元兵士が、同国に移住していることを知り、復讐をしようと追いつめる。しかしその男はミアリアに許しを乞い、拳銃自殺する。作品では、オース

トラリアに住むカンボジア人たちの生活の様子、たとえば、英語とカンボジア語が混じる家族間の会話、カンボジア人の仏教寺院や仏教行事の様子も伺いみることができる。出演者は、みなオーストラリアやニュージーランドに難民として渡ってきたカンボジア人であり、ボル・ポト時代の経験の有無の違いはあるものの、それぞれの役柄を演じることで当時と向き合うことになったという¹⁷⁾。

ディアスポラたちは、サヨアン・スアンが語っているように、自らの過去を知ることなしに、よりよい現在や将来は築けないと気付き¹⁸⁾、ボル・ポト時代を振り返り、あるいは新たに学び直して、さまざまな形を伴ってカンボジアへの里帰りをするのである。

自分はどこから来たのか—— 二世たちのカンボジアへの想い

そのような想いは、ボル・ポト時代を直接経験していない二世たちにも継がれていく。『ニューイヤー・ベイビー』(2006)は、カンボジア・タイ国境の難民キャンプで生まれた女性ソチアタ・パウ監督が、両親、きょうだいとともにアメリカに渡り、20年以上たってから、両親がボル・ポト時代の経験を初めて語る、というところから物語が始まる。ソチアタが両親とともにカンボジアを訪ねる旅の道中で、両親にインタビューすることで、それまで隠されていた家族の関係について理解できるようになる。自分の親にインタビューをして当時のことを語らせるという手法、そして資料映像、再現ドラマの代わりにアニメーションを挿入する、という手法を初めて採用した作品である。

『不在』(2007)は、ボパナ視聴覚リソースセンターで学んだ男性マシュー・ペンの作品である。父の母国である未知なるカンボジアをマシュー・ペンが訪れ、祖父、親類たちにボル・ポト時代以前からの物語を聞く。マシュー・ペンの父はボル・ポト時代になる寸前に家族を連れてフランスに移住した。父のカンボジアとマシュー・ペンのカンボジアは、ボル・ポト時代の存在によって違うものになってしまったことが、親類たちの語りと写真から明らかになっていく。父が捨てたカンボジアはマシュー・ペンのカンボジアとなり、マシューはカンボジア人であることを確信する様子が描かれる。

『父のこと』(2010)は、リティ・パンの指導を受けた男

13) <http://www.aems.illinois.edu/publications/filmreviews/poisonstree.htm> [Accessed 8 November 2015]

14) <http://www.camp32.com/synopsis.html> [Accessed 8 November 2015]

15) Murray, Bennett. 2014. "Revisiting a childhood nightmare" *The Phnom Penh Post*. 20 September (<http://www.phnompenhpost.com/post-weekend/revisiting-childhood-nightmare>) [Accessed 8 November 2015]

16) Graceffo, Antonio. 2006 "The Red Sense, Film Calls for Forgiveness in the Wake of the Khmer Rouge Genocide" *Genocide Watch* (http://www.genocidewatch.org/images/Cambodia_06_The_Red_Sense_Film_Calls_for_Forgiveness_in_the_Wake_of_the_Khmer_Rouge_Genocide.pdf#search=Tim+Pek) [Accessed 8 November 2015]

17) 同上

18) <http://lostchildthefilm.org/> [Accessed 8 November 2015]

性ギョーム・スオンのデビュー作品で、政治犯収容所 S21 で初期に処刑された、フランス語教師の父の真相を探ろうと、娘スタリーが特別法廷に参加し、被告で元所長ドゥッチの言葉に耳を傾ける様子を描く¹⁹⁾。

モントリオール育ちの男性グラフィティ・アーティスト Fonki のカンボジアでの旅を追ったのが『ルーツは残る』(2014)である。Fonki は、今こそ、ディアスポラたちがカンボジアの復興、成長のために役に立つべきだ、との信条から、プノンペンに行く²⁰⁾。ポル・ポト時代に殺された祖父母たちの巨大な絵を壁に描き、家族の経験してきた悲劇を表現する。またカンボジアで現在成長しつつあるヒップホップグループとも会うことで、自分のアイデンティティを見出していく²¹⁾。

『ゴールデン・スランバーズ』(2011)は、1960年代、70年代前半のカンボジア映画産業界の黄金期を、当時の映画作品の数々とそれらの主題歌、映画監督、俳優など映画関係者たちのインタビューから、現在にその姿を蘇らせるかのように描く。同時に現在のプノンペンの映画館をめぐる風景、映画関係者たちにとってのポル・ポト時代をも対比させる。監督のダヴィ・チュウは1982年フランス生まれの男性で、祖父にあたるヴァン・チャンが映画黄金期の著名な映画監督であったこともあり、黄金期については、フランス在住の親族に以前から聞いていたという。2009年にカンボジアの大学生を対象に映像のワークショップを半年に渡って行い、これをもとにして映像制作グループ「コン・クマエ、コーン・クマエ(カンボジアの映画、カンボジアの子)」の立ち上げに関わった。現在このグループは、若いフィルムメーカーを生み出し、短編を中心としたさまざまな作品を公開している²²⁾。

このような「二世」は、両親がカンボジア人とは限らない。『パパ、おやすみなさい』(2014)は、ドイツ人の母、カンボジア人の父を持つマリナ・ケムが父オタラ・ケムのカンボジア人としての軌跡をたどる物語である。オタラ・ケムは、1965年、エンジニアになるべく東ドイツに留学した。10年後、祖国はポル・ポト政権となって帰国できなくなり、ドイツ人女性と結婚、子どもにも恵まれる。だが、死に際まで子どもたちにカン

ボジアについて多くを語らなかったのだが、遺言は、遺骨はカンボジアに埋めて欲しいというものだった。娘のマリナ・ケムは父との約束を果たすべく未知の国カンボジアに行き、そこで父の生きてきた歴史を知り、父の親族と出会い、自らのカンボジア人としてのアイデンティティに目覚めていく²³⁾。

カンボジア人としてのルーツは持たないが、カンボジアと関わり、亡くなった肉親を持つ者もまた「二世」と言える。『ブラザー・ナンバーワン』(2011)は、1978年にクメール・ルージュに捕えられ、S21で拷問、殺害されたニュージーランド人のケリー・ハミルの最期を、弟ロバートがたどる物語である。タイトルの「ブラザー・ナンバーワン」は、通常、ポル・ポトを指す名称であるが、ここではハミル家の長男ケリーをも含意している。ケリーは当時流行していたヒッピーとして自由を謳歌し、友人3人とともにシンガポールからバンコクを目指してヨットで航行していたところ、悪天候のため、カンボジアの領海に入ってしまったのだった。ロバートは、S21の元看守、元カメラマン、被害者などリティ・パンの『S21』での登場人物たちとも面会する²⁴⁾。ロバートはクメール・ルージュ特別法廷で、ドゥッチとも対面するが、死による報復は何も生み出さないと、ドゥッチの死刑は望まないのであった²⁵⁾。

経験を語る勇気を得て—— カンボジア国内のカンボジア人の語り

1980年代はソ連、ベトナムに支援された社会主義政権下にあり、「ポル・ポト、イエン・サリ、キュー・サンパンらによる人民虐殺政権は悪」というはっきりしたイデオロギーがあった。だが国連の介入により20年あまり続いた内戦が終息し、和平がもたらされた1990年代以降、複数政党制、自由市場経済を標榜してきたカンボジア政府にとって、国王の下での「国民和解」はなくてはならない重要な要素であった。フン・セン首相

23) <http://cambodiatownfilmfestival.com/blog/?p=671> [Accessed 8 November 2015]

24) Kuipers, Richard. 2011. "In the deeply moving docu "Brother Number One," New Zealander Rob Hamill confronts Comrade Duch, the Khmer Rouge leader who ordered the torture and execution of Hamill's brother Kerry at the notorious S-21 prison in 1978" *Variety*. August 10, <http://variety.com/2011/film/reviews/brother-number-one-1117945789/> [Accessed 8 November 2015]

25) The New Zealand Herald, 2009. "Rob Hamill to be heard at Khmer Rouge trial" Apr 1, <http://www.nzherald.co.nz/world/news/article.cfm?id=2&objectid=10564725> [Accessed 8 November 2015]

19) <http://www.lidf.co.uk/film/about-my-father/> [Accessed 8 November 2015]

20) Crane, Brent. 2015. "A return to the roots: diaspora rebuild" *The Phnom Penh Post*. 10 October. <http://www.phnompenhpost.com/post-weekend/return-roots-diaspora-rebuild> [Accessed 8 November 2015]

21) 同上

22) <https://konkhmerkounkmer.wordpress.com/about/> [Accessed 8 November 2015]

をはじめとして、少なからぬ数の政府高官がクメール・ルージュであったために、政府としてボル・ポト時代をどのように扱うかは簡単には立場を表明できないでいた。

ボル・ポトは1998年、タイ国境に近いジャングルで死亡した。2001年、カンボジア政府が特別法廷設置法を制定し、2003年にカンボジア政府と国連が協定を締結、2006年、同法廷の運営が開始され、ドゥッチに対する裁判が2009年から始まった。

この法廷が設置されたことで、政府のボル・ポト時代に対する評価が明確になった。小学校、中学校、高校の国語や社会の教科書に、ボル・ポト時代や、同裁判について掲載されるようになり、ボル・ポト時代の経験を綴ったカンボジア語書籍も国内で多く出始める。NGO主導による同法廷に関する市民活動なども増え、2008年には同法廷に被害者が初参加した。カンボジア国内にいるカンボジア人がボル・ポト時代の経験を公に自由に語ることでできる雰囲気次第に整っていったと言える。同時に既述のボバナ視聴覚リソースセンターによって人材も育成され、映像作品の制作、発表の機会も拡大していった。

まず、映像作品を通して声を挙げたのは、カンボジアの英字新聞『プノンペン・ポスト』の記者としてのキャリアを持つテート・ソンバットだった。10歳の頃からの疑問であった、「自分の家族がなぜ殺されなければならなかったのか」を明らかにしたい、という長年の思いを形にしたのが『人民の敵』(2010)である。テート・ソンバットは1999年からクメール・ルージュ元幹部たちとの接触を試み始める。クメール・ルージュのナンバー・ツーであったヌオン・チア元人民代表議会議長と2001年から3年間、定期的に面会を続けて信頼関係を築いていく。そしてついにヌオン・チアは当時、ボル・ポトとともに「同志」たちを処刑するにいたったかを語り始める²⁶⁾。この作品はカンボジア国内での一般公開はされていない。またクメール・ルージュ特別法廷でのヌオン・チアの裁判の証拠として利用可能かどうかで議論が噴出し、テート・ソンバットはクメール・ルージュのことをあまりにも「知りすぎた」として、「カンボジア政府から脅迫を受けて」いるため、現在アメリカに滞在している²⁷⁾。

クメール・ルージュの元最高幹部で映像を通して多

くを語っているのはS21元所長のドゥッチである。『クメール・ルージュと非暴力の男』(2012)では、クメール・ルージュ裁判でのドゥッチの弁護士を務めた弁護士の一人、フランス人フランソワ・ルーが、2012年に終身刑の判決を受けるまでのドゥッチとのコミュニケーションをカメラで詳細に追ったドキュメンタリーである²⁸⁾。

『おばあちゃんが伝えたかったこと——カンボジア・トゥノル・ロ村の物語』(2011)は、ボル・ポト時代を生き延びた村人たちが、ビデオカメラを自ら手にして過去と向き合い、互いの体験や記憶を語り、若い世代にその経験を語る様子を収めたワークショップなどから構成されているドキュメンタリーである。

ボル・ポト時代の自らの経験を語る言葉や勇気を数十年に渡って持てずにいた人々が初めて語る様子を描いたのが『カンボジアの傷』(2014)である。地方に暮らす52歳の漁師トゥートが、身ぶり、視線、表情で15歳のときの刑務所での経験を、その傷跡を見せながら、カンボジア語のわからない監督に向かって語るもので、映像と静止画から構成されている²⁹⁾。トゥートの心身に刻みこまれた深い傷と「静かな語り」を通して、カンボジアの歴史的傷跡を明るみに出そうとした作品である。

既述のような素地ができ始める前に公開されたのが『タンキム——ボル・ポト政権下の性暴力を生き抜いて』(2004)である。この作品は、タン・キムという女性が、ボル・ポト時代にクメール・ルージュ兵たちによってレイプされた経験を、現場と同様の水田で語るものである。カンボジア国内の一般女性がボル・ポト時代の体験について、特に性暴力被害について述べた作品はこれがおそらく初めてであろう。

『赤い結婚』(2012)は、人口増産のためにクメール・ルージュ兵士と16歳で強制結婚させられた女性パエン・ソクチャンへのインタビューである。当時、25万人の女性が強制結婚の被害に遭ったにも関わらず、これまでは、被害者である女性たちが羞恥心から声を挙げるができなかったということもあり、問題としても大きく取り上げられてこなかった。パエン・ソクチャンは30年近く沈黙してきたが、カンボジア特別法廷が開かれたことで、なぜこのようなことが起こったのか

26) <http://enemiesofthepeoplemovie.com/>

27) Zhou, JACK J. 2014. “Cambodian Filmmaker Finds Truth Beneath the Killing Fields” *The Harvard Crimson*. April 23, <http://www.thecrimson.com/article/2014/4/23/thet-sambath-carpenter-center/> [Accessed 8 November 2015]

28) http://www.watchdocs.pl/2012/f/the_khmer_rouge_and_the_man_of_non_violence-film-24-en.html [Accessed 8 November 2015]

29) <http://scarsofcambodia.overblog.com/press-kit> [Accessed 8 November 2015]

真実を知ろうと撮影に応じ、自らが背負ってきた苦しみ、体験を話したという³⁰⁾。

新世代による新世代のための作品—— ポル・ポト時代の新しい描き方

現在は、ポル・ポト時代以降に生まれ、ポル・ポト時代に対して積極的なアプローチなしには馴染みのない世代が観客となり、またフィルムメーカーとなる時代に入ってきている。

『シアター・プノンペン(遺されたフィルム)』(2014)は、若い世代を観客に想定した作品のひとつだろう。主人公の若い女性ソプオンは、ポル・ポト時代のトラウマを抱えた母と軍人で厳格な父のもとで孤独感に苛まれながら日々を過ごしていた。古ぼけた元映画館で映画技師が写したフィルムの最後の部分が紛失してしまっている映画を見たことで、封印されてきた両親の悲しい過去を知る。家族ひとりひとりがその過去と向き合い、最終的にはソプオンが紛失した部分を撮り直し、家族全員でその映画を鑑賞して、和解する、という物語である。主人公の母親役は、1960年代から女優として活躍しており、『ゴールデン・スランバーズ』でも貴重な証人の一人として出演しているディー・サベートである。物語はこれまでの「ポル・ポト映画」には見られない、観客の興味を引き続けるサスペンス風にプロットが構成されている。女性監督のソト・クォーリーカーは、自身の父親をポル・ポト時代に殺されているが、当時2歳だった彼女に父の記憶はなく、それについて多く語ることのなかった母親に愛情深く育てられてきたという³¹⁾。作品では、親と子、過去と現在、都市と地方、静謐と残虐さ、被害者と加害者など、さまざまな対立を示しながら、愛、犠牲、許し、償いと理解の過程を描いている³²⁾。

『進むべき道』(2014)は、若い世代に支持されているBBCメディア・アクションによる全12話からなるテレビドラマ「Loy 9」シリーズの第1話から第4話で、単独の映画作品としても上映されている。物語は、かつて仲良くしていた3人の若い女性たちが、5年間の別離の後、今は亡き祖父の日記にあったポル・ポト時代

に隠された財宝を探しに行くところから始まる。祖父の日記を読みながら、ポル・ポト時代前後の祖父の足跡をたどると同時に、当時のカンボジア社会を取り巻く情勢を知るという構成になっている。クメール・ルージュを一方的に悪と決め付けるのではなく、クメール・ルージュに入ったのには当時の社会背景を鑑みると納得できる理由があった、またクメール・ルージュになったからといって全員が人間性を失ってしまったのではない、という視点が見られる。男性監督のチェイ・ソンバットは、ほかにも複数のショートフィルム作品を発表、受賞している³³⁾。

『忘れてないさ——カンボジアのロックンロール』(2014)は、1960年、70年代にカンボジアで花開いたカンボジアのポップスを、現在生き残っているロックグループのメンバーたちへのインタビューを当時のロックと映像をもとに構成したものである。主にインタビューに答えているのは、当時、カンボジア初のバンド、およびサーフミュージック・グループとされる1959年結成の「バクサイ・チャム・クロン」³⁴⁾のメンバーの一人でギタリスト、モル・カニョル、また1967年結成の4人の男性グループ「ドロッカー」のメンバーの一人、トゥーチ・タナである。

『モノローグ』(2015)は、1980年のカンボジア生まれ、フィルム写真などを使った現代芸術で頭角を現している男性、ヴァンディ・ラタナの作品である³⁵⁾。色鉛筆で描かれたような静謐で美しいカンボジアの自然の風景と、詩のような穏やかなカンボジア語の朗読で構成されている。作品では、見事な枝ぶりで、涼しげな木陰をつくっている2本のマンゴーの木の下が映し出され、かつて大勢の人々がポル・ポト時代に亡くなった場所であることが説明される。そこで亡くなった不特定多数であり、またただひとりの大切な「きみ」に対する語りかけで物語は進行する。

『米』(2014)は、1990年生まれのカンボジアの女性監督ソティア・イネスの7分間のショートフィルムで、ポル・ポト時代の子どもたちが直面していた飢え、という問題に焦点を当てて描いた作品である。『遙か彼方に』や『消えた画——クメール・ルージュの真実』を見ることでイメージを具体化し、モノクロのサイレントにすることで、暗黒と沈黙の時代を表現した³⁶⁾。

30) Voice of America, 2011. "Red Wedding' Shows Lasting Scars of Forced Marriage", June, 6. (https://www.youtube.com/watch?v=tbAQyX_PHZc) [Accessed 8 November 2015]

31) (<http://www.thelastreel.info/public/documents/The%20Last%20Reel.pdf>) [Accessed 8 November 2015]

32) 同上

33) (<https://vimeo.com/cheysambath>) [Accessed 8 November 2015]

34) カンボジアの古典物語のひとつ。

35) (<http://vandyattana.com/cv/>) [Accessed 8 November 2015]

36) 同上

この作品は東南アジアの短編映画祭であるTropfest SEA 2014で最優秀賞を受賞している。

エンターテインメント作品の一要素として—— ボル・ポト時代の特殊性を利用する

ボル・ポト時代やクメール・ルージュが作品の主題ではなく、エンターテインメント性のある作品の物語の舞台、発端、アクセントなどに使われていることもある。『カンボジア・エクスプレス』(1982)は、『キリング・フィールド』よりも前に制作され公開された作品で、いわゆる「ベトナム戦争もの」映画の舞台をボル・ポト政権下のカンボジアに置き換えたような物語である。クメール・ルージュによるプノンペン陥落で、カンボジア人の恋人と強制的に別れることになったアメリカ人ジャーナリストが、ベトナム戦争で活躍した元アメリカ軍人の助けを借りて、カンボジアに潜入し恋人を救出する。香港のアクション映画『復讐のプレリュード——大冒険家』(1995)では、舞台を1990年代に設定して、ボル・ポトと想定できる人物がタイとの密貿易で大富豪となり、マフィアのボスとなっている。同じく香港の『パープルストーム』(1999)は、クメール・ルージュがテロリストになっている。作品では、ボル・ポト政権での革命に失敗したのは、科学技術を使用しなかったことが原因だった、ということを出発点に物語が進む。最新の化学兵器が香港で強奪されたため、香港警察は香港での被害を想定するが、物語の終盤で、テロリストたちがその化学兵器を使ってカンボジア全土を破壊し、地下に新たに築いた都市で革命を実行するはずだった、ということが明らかになる。

『兄弟の闘い』(2015)は、カンボジアとフィリピンの初の合作映画である。ボル・ポト時代以前に、婚約者を残してフィリピン留学に行ったカンボジア人男性ソクムが、その後、ボル・ポト時代になって帰国できず、フィリピン人と結婚し、そのまま25年間が経過した、という設定で物語は始まる。父を同じくするフィリピン人とカンボジア人の二人の兄弟が、カンボジアの伝統武術であるボカタオ大会で対戦する。長期に渡って帰国できなかった、その間の情報が全くない、ということの原因にボル・ポト時代とその前後の社会情勢の混乱を用いることは観客にとって納得のいくプロットである。

『クーデター』(2015)は、東南アジアの某国に妻と幼い娘二人を伴って赴任したばかりのアメリカ人男性

ジャックが、言語も地理も社会文化もまったくわからない中で、その国の政変に巻き込まれ、命を狙われる中を逃走する、という物語である。「東南アジアの某国」との設定ではあるが、看板やライオットシールド(盾)に書かれた文字がカンボジア文字を無秩序に並べたものである、プノンペンに実在する地名、地雷の被害者が伝統音楽を奏でて物乞いする、川を下るだけで容易に行ける隣国がベトナムであることなど、カンボジアを想定していることが明らかである。また反政府集団は、外国人は全員抹殺しなければならない、という主張を持つ、赤い格子柄の手拭を頭や首に巻いている、という点が、クメール・ルージュを連想させる。反政府集団たちが現地の言葉でシュプレヒコールしているのを理解できないジャックが、傍に居合わせたフランス人に内容を尋ねると即座に説明する、というシーンがある³⁷⁾。『キリング・フィールド』や『運命の門』でも読みとれるように、フランス人は現地の言葉、文化を学ぶが、アメリカ人は学ばない、というステレオタイプが示されている。この作品はカンボジアでは「カンボジアの文化に影響を与えうる」という理由で上映禁止となっている³⁸⁾。

おわりに—— これからの「ボル・ポト映画」の可能性

1979年1月にボル・ポト時代が終わって、35年近くが経過し、ボル・ポト時代の捉え方が、世代や育った環境によって異なってきた。長い間、「ボル・ポト映画」は、外国人が作り、外国人が観る「外国人の物語」だった。しかし2000年代に入って、クメール・ルージュ特別法廷の設置、リティ・パンの世界的な活躍、そして若いフィルムメーカーの輩出、作品公開の機会の拡大など複数の要因が重なったことで、「ボル・ポト映画」は、カンボジア国内を含めた世界各国にいるカンボジア人が作り、観る、「自分たちの物語」に変化してきた。アンコール遺跡だけではなく、ボル・ポト時代はカンボジア人のアイデンティティのひとつとしてカンボジア人が受け入れ、認めるようになってきたことの証だろう。一方で、カンボジアに関する映像作品といえば、ボル・

37) ただし、作品の中で使用されている言語は、ロケがタイで行われたために、タイ語であり、実際にカンボジア語が使われるのは物語冒頭の「早く」の一言だけである。

38) Mao, Monkolransey and Will Jackson. 2015. "Going off script". *The Phnom Penh Post*. 14 August. (<http://www.phnompenhpost.com/post-weekend/going-script>) [Accessed 8 November 2015]

ポト時代というテーマを扱う、あるいはそのエッセンスをどこかに入れることで、海外からの関心や評価が高くなるという制作者の自覚も芽生えてきている。

カンボジアのみならず、世界大国のさまざまな目論みや世界情勢によってもたらされたボル・ポト時代は、4年弱の短い期間であったが、その間の年や月によって、あるいは地域によって、そしてカンボジア人のひとりひとりのバックグラウンドによって、その経験は一人として同じではない。「被害者」を前にして自分の言葉を持ってないままにまだ沈黙している多くの人々の物語や、個人としてのボル・ポトに肉薄した作品の不在、ある日突然降ってくるように始まるボル・ポト時代の描き方など、「ボル・ポト映画」は今後も、さまざまな可能性を持ちつつ次々と制作されていくに違いない。

映画リスト

データはInternet Movie Database (http://www.imdb.com/)を参考にした(凡例:邦題、①原題、②監督名、③制作年、④制作国、⑤使用言語、⑥日本での公開、⑦フィクション／ドキュメンタリー)

『キリング・フィールド』……①*The Killing Fields*、②Roland Joffé、③1984年、④イギリス、⑤英語、⑥劇場公開(1985年)/DVD販売、⑦フィクション

『ハイン・ニョルのキリング・フィールド』……①*The Killing Fields of Dr. Haing S. Ngor*、②Arthur Dong、③2015年、④アメリカ、⑤英語、⑥未公開、⑦ドキュメンタリー

『地雷を踏んだらサヨウナラ』……①邦題に同じ、②五十嵐匠、③1999年、④日本、⑤日本語、⑥劇場公開(1999年)/DVD販売、⑦フィクション

『自由への道』……①*The Road to Freedom*、②Brendan Moriarty、③2010年、④アメリカ、⑤英語、⑥未公開、⑦フィクション

『運命の門』……①*Le Temps des aveux*(自白の時)/*The Gate*、②Régis Wagnier、③2014年、④フランス/カンボジア/ベルギー、⑤フランス語、⑥未公開、⑦フィクション

『九層の地獄』……①*Devět kruhů pekla*、②Milan Muchna、③1987年、④チェコスロヴァキア/カンボジア、⑤チェコ語/カンボジア語、⑥未公開、⑦フィクション

『空白のページ』……①*White Page*、②Ho Quang Minh、③1991年、④カンボジア/スイス、⑤カ

ンボジア語、⑥アジアフォーカス・福岡映画祭(1992年)/テレビ放送(NHK)、⑦フィクション

『遙か彼方に』……①*ប្លុកទៅស្នេហា/Lost Loves*、②Chhay Bora、③2010年、④カンボジア、⑤カンボジア語、⑥未公開、⑦フィクション

『消えた画——クメール・ルージュの真実』……①*រូបភាពដែលបាត់បង់/L'Image Manquante*/*The Missing Picture*、②Rithy Panh、③2013年、④カンボジア/フランス、⑤フランス語、⑥東京フィルムメックス(2013年)/DVD販売、⑦ドキュメンタリー

『田んぼの民』……①*អ្នកស្រែ/Les Gens de la rizière*、②Rithy Panh、③1994年、④カンボジア/フランス、⑤カンボジア語、⑥未公開、⑦フィクション

『戦争の後の美しい夕べ』……①*រាត្រីមួយក្រោយសង្គ្រាម/Un soir après la guerre*、②Rithy Panh、③1998年、④フランス/カンボジア、⑤カンボジア語、⑥難民映画祭(2008年)/テレビ放送、⑦フィクション

『飼育』……①*សត្វប្រមាញ់ចិញ្ចឹម/Gibier D'élevage*、②Rithy Panh、③2011年、④フランス/カンボジア、⑤カンボジア語、⑥東京国際映画祭(2011年)、⑦フィクション

『ボパナ——カンボジアの悲劇』……①*Bophana, une tragédie cambodgienne*、②Rithy Panh、③1996年、④フランス/カンボジア、⑤カンボジア語、⑥未公開、⑦ドキュメンタリー

『S 21 クメール・ルージュの虐殺者たち』……①*ស្ថាប័នព័រហ័ន/S21, la machine de mort Khmère rouge*(S21 クメール・ルージュの殺人マシン)、②Rithy Panh、③2001年、④フランス、⑤カンボジア語、⑥山形国際映画祭(2003年)、⑦ドキュメンタリー

『ドッチ、地獄の所長』……①*Duch, le maître des forges de l'enfer*、②Rithy Panh、③2011年、④フランス/カンボジア、⑤フランス語/カンボジア語、⑥未公開、⑦ドキュメンタリー

『笛吹き人』……①*The Flute Player*、②Jocelyn Glatzer、③2003年、④アメリカ、⑤英語、⑥未公開、⑦ドキュメンタリー

『ロスト・チャイルド』……①*Lost Child*、②Janet Gardner/Sopheap Theam、③2013年、④アメリカ、⑤英語、⑥未公開、⑦ドキュメンタリー

『毒の木を離れて』……①*Out Of The Poison Tree*、②Beth Pielert、③2008年、④アメリカ、⑤英語、⑥未公開、⑦ドキュメンタリー

『キャンプ32』……①*Camp 32*、②Bunhom Chhorn、③2014年、④オーストラリア、⑤英語、⑥未公開、⑦ドキュメンタリー

『赤い感覚』……①*វិញ្ញាណក្រហម/The Red Sense*、②Tim Pek、③2006年、④カンボジア/オーストラリア、⑤カンボジア語/英語、⑥未公開、

⑦フィクション

- 『ニューイヤー・ベビー』……①*New Year Baby*、②Socheata Poeuv、③2006年、④アメリカ、⑤英語、⑥難民映画祭(2008年)、⑦ドキュメンタリー
- 『不在』……①*L'absence*、②Mathieu Pheng、③2007年、④フランス、⑤フランス語、⑥未公開、⑦ドキュメンタリー
- 『父のこと』……①*About My Father*、②Guillaume Suon、③2010年、④カンボジア、⑤カンボジア語、⑥未公開、⑦ドキュメンタリー
- 『ルーツは残る』……①*The Roots Remain*、②Jean-Sébastien Francoeur/Andrew Marchand-Boddy、③2014年、④カナダ/カンボジア、⑤フランス語、⑥未公開、⑦ドキュメンタリー
- 『ゴールデン・スランバーズ』……①*Le sommeil d'or*、②Davy Chou、③2011年、④フランス/カンボジア、⑤フランス語/カンボジア語、⑥東京国際映画祭(2012年)、⑦ドキュメンタリー
- 『パパ、おやすみなさい』……①*Bonne Nuit Papa*、②Marina Kem、③2014年、④ドイツ/カンボジア、⑤ドイツ語、カンボジア語、英語、⑥未公開、⑦ドキュメンタリー
- 『ブラザー・ナンバーワン』……①*Brother Number One*、②Annie Goldson、③2011年、④ニュージーランド、⑤英語、⑥未公開、⑦ドキュメンタリー
- 『人民の敵』……①*Enemies of the People*、②Thet Sambath/Rob Lemkin、③2009年、④カンボジア/イギリス、⑤カンボジア語/英語、⑥未公開、⑦ドキュメンタリー
- 『クメール・ルージュと非暴力の男』……①*Le khmer rouge et le non-violent/The Khmer Rouge and the Man of Non-violence*、②Bernard Mangiante、③2011年、④フランス/カンボジア、⑤フランス語/カンボジア語、⑥未公開、⑦ドキュメンタリー
- 『おばあちゃんが伝えたかったこと——カンボジア・トゥノル・ロ村の物語』……①*យើងចង់ដឹងអ្វីក្នុងយើង/We Want (U) To Know*、②Ella Pugliese、③2013年、④カンボジア語、⑤カンボジア、⑥山形国際ドキュメンタリー映画祭(2013年)、⑦ドキュメンタリー
- 『カンボジアの傷』……①*Scars of Cambodia*、②Alexandre Liebert、③2014年、④フランス、⑤フランス語、⑥未公開、⑦ドキュメンタリー
- 『タンキム——ポル・ポト政権下の性暴力を生き抜いて』……①*The Khmer Rouge Rice Fields: The Story of Rape Survivor Tang Kim*、②Rachana Phat、③2004年、④カンボジア、⑤カンボジア語、⑥東京YWCAピースウィーク(2007年)、⑦ドキュメンタリー
- 『赤い結婚』……①*Red Wedding/Noce Rouge*、②Lida

Chan/Guillaume Suon、③2012年、④フランス/カンボジア、⑤カンボジア語、⑥未公開、⑦ドキュメンタリー

- 『シアター・プノンペン(遺されたフィルム)』……①*ជំងឺលចុងក្រោយ/The Last Reel*、②Sotho Kulikar、③2014年、④カンボジア、⑤カンボジア語、⑥東京国際映画祭(2014年)/劇場公開(2016年)、⑦フィクション
- 『進むべき道』……①*វិថីដែលត្រូវទៅ/Down This Road*、②Sambath Chey、③2014年、④カンボジア、⑤カンボジア語、⑥未公開、⑦フィクション
- 『忘れてないさ: カンボジアのロックンロール』……①*Don't Think I've Forgotten: Cambodia's Lost Rock and Roll*、②John Pirozzi、③2014年、④フランス/カンボジア/アメリカ、⑤フランス語/カンボジア語/英語、⑥アジアフォーカス・福岡国際映画祭(2015年)、⑦ドキュメンタリー
- 『モノローグ』……①*Monologue*、②Vandy Rattana、③2015年、④カンボジア、⑤カンボジア語、⑥東京都現代美術館(2015年)、⑦ドキュメンタリー
- 『米』……①*Rice*、②Sothea Ines、③2014年、④カンボジア、⑤カンボジア語、⑥未公開、⑦フィクション
- 『カンボジア・エクスプレス』……①*Angkor: Cambodia Express*、②Lek Kitaparaporn、③1982年、④タイ/イタリア、⑤英語、⑥未公開、⑦フィクション
- 『復讐のプレリュード——大冒険家』……①大冒険家/*The Adventurers*、②Ringo Lam、③1995年、④香港、⑤英語/広東語、⑥東京国際ファンタスティック映画祭(1996年)/DVD販売、⑦フィクション
- 『パープルストーム』……①紫雨風暴/*Purple Storm*、②Teddy Chan、③1999年、④香港、⑤広東語、⑥DVD販売、⑦フィクション
- 『兄弟の闘い』……①*សង្គ្រាមប្លន់ប្លន់/Blood in Dispute*、②Ken Simpson、③2015年、④フィリピン/カンボジア、⑤タガログ語/カンボジア語/英語、⑥未公開、⑦フィクション
- 『クーデター』……①*No Escape*、②John Erick Dowdle、③2015年、④アメリカ、⑤英語、⑥劇場公開、⑦フィクション